

## ブータン王国訪問記



木村 学而  
陸経9（所沢市）

### はじめに

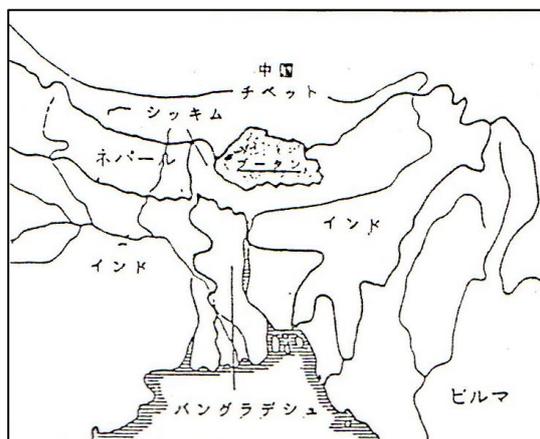
平成3年4月7日から28日までの22日間私はブータンをはじめとしタイ及びインドを訪れた。ブータンには、昨年の夏も足を踏み入れたことがある。ここでは、かんがい施設、農道、河川護岸などの建設に関する日本政府による無償資金協力事業が行われている。この事業に係るコンサルタント業務を私の所属する北海道開発コンサルタント(株)が受注し、コントラクターである三井物産(株)及び大日本土木(株)の協力の下にこの業務を昨年度から鋭意実施している。

私は特にプロジェクト・マネージャに任命されているために、事業の完了する平成7年まではたびたびブータンを訪問し政府と業務推進についての事務折衝に当たるかわらコントラクターに対する業務指示などを行わねばならないことになっている。

### 低迷を続ける国民総生産

ブータンの経済は、その半ば以上を農林業及び牧畜業に依存しており、しかも全労働力の90%以上がこれら産業に従事している。産業の開発はこのところ徐々に進められてはいるものの、とにかくヒマラヤ山

脈の間に介在する僅かばかりの低平地が利用できるに過ぎないといった地理的条件や遅れた社会・経済条件などの制約を受け、一部を除きこれまでの確固とした成果をあげるに至っていない。国土面積は47,000平方km（関東地方の約1.5倍）人口は約1,345,000人を数えるが、1人当りの国民総生産は僅かに150米ドル程度に止まり数字上は世界最貧国の一つに数えられている。



ブータンとその周辺国

### 展開が期待される農林・牧畜業

現行の経済状態は必ずしも好ましいとは言えないが、ここ数年来の政府による積極的な経済施策を反映し、地域によっては農林・牧畜業はかなりの生産をあげている。主要農作物は、米、小麦、とうもろこし、じゃがいも、大麦、カルダモン（香料の原料）、そば粉などで、パロ谷ではその生産高は特に高い。果実の栽培もことのほか盛んである。牧畜業としては、ヤクの飼育が広範に進められている。

### ポテンシャルの大きな水力発電

水力発電は、その恵まれた立地条件に幸

いされ、極めて好調な推移を遂げている。

プンツォリンーティンパー間の幹線道路沿いに建設された大規模水力発電所は、この国の発展に寄与するところが極めて大きい。余剰電力はインドにも売電され、外貨獲得に大きな役割を果たしている。

#### 開発の動きと今後の予想

最近における動きとしては、先進諸国をはじめ国際開発金融機関の協力による開発が、小規模ではあるが組織的に進められている。ブータン全土にわたる小規模発電プロジェクトやパロ谷における農業総合開発プロジェクトは、わが国による経済協力の一例としてあげられる。来年以降は、通信プロジェクトも陽の目を見ることがなっている。

これらプロジェクトの実現により、ブータンの経済はそれがたとえ地域的なものであるにしても、逐次それなりの効果をあげ、やがてはそれらが予期以上の成果となって現れるかも知れない。この国がアジアの他の国々に伍して、たくましい発展を遂げていく日の一日も早く来ることを祈って止まない。

日本の習慣に酷似したブータンのそれや、食生活などについては、いずれ稿を改めてご紹介したい。

秩父平成3年12月 33号

## ブータンにおける社会不安

### とその行方

#### 民主化の動き

東欧における民主化の動きやベルリンの壁の崩壊を契機として、昨年来、社会不安は世界的な規模で予想以上の広がりを見せている。アジアでは、ミャンマー（かつてのビルマ）で、それまでにも、学生を中心とした革新グループによる度重なる反政府騒動が繰り返されていたが、東欧における民主化の動きに刺激されたのか、首都ラングーンを中心に熾烈な反政府闘争が燃えあがった。

ネパールでは、年来の旧態依然たる施策に不満を抱いていた市民たちが王政批判を掲げて立ち上がり、最終的には国王からの制度改訂に関する言質を勝ち取ることに成功した。ブータンも例外ではありえなかった。

#### 若き国王と品行令

ブータンも王制をとっており、現在はジグミ・シンギ・ワンチュック殿下が国王の地位についている。前国王の跡を16歳の若さで継承した国王は、国家の統一性を維持し促進するために天与の賢明さと強靱な実行力にもの言わせ、相次いで革新的な勅令を公布して国民の指導に当たっている。昭和天皇大葬の礼にこの国王も参列されたが、わが国の和服に酷似したゴと呼ばれる民族衣装を身にまとい数多くの年配の途上国首脳と肩を並べた国王の毅然とした態度に、多くの人達はそれなりの感銘を覚えた

と言われている。こうした国王ではあるけれども、国民の3分の1を占めるネパール系住民の、1部を除く人たちにとっては、我慢のならぬ存在であるようだ。すでに古くからこの国に移住してきていたし、また最近も移住を続け主として南のインド国境に近い部分に住み付いている。国王はさきに述べた勅令の一つとして、品行令を公布した。詳細はともかく、品行令では、ブータン人の男子にはゴと呼ばれる伝統的な衣装の着用を強制し、また全学童に公用語としてゾンガ語の習得を義務づけた。

### ネパール系住民との確執

ネパール系住民としては、たとえブータンへ移住してきたとしても、彼らには本来の文化があり、言語にしても衣装にしても独自のものをもっている。品行令に示されたネパール文化や主体性の否定は、彼らネパール人にとっては我慢のならぬことであつたものと解釈される。貧富の差による確執もあつたといわれるが、こうしたことがともかく紛争の原因となっている。記録によれば、南に位置するいくつかの県では予想以上の騒乱となり、死者はもちろん負傷者も続出した。今年に入ってから騒乱は一応鎮静化しているが、局部的にはまだ緊張が続いているという報道もある。ブータン政府としては、品行令施行により発生したこの種騒乱問題の反省として、強制が過ぎたのではないかという解釈をしているとも言われている。しかし、国自体が小さいことから、民族的な甘えは許されないという強硬な意見もあるようだ。

ヒマラヤ山系に閉じ込められたような山国でもあり、またこれまでもどちらかと言

えば閉鎖的な施策をとってきた経緯もあることから、今後は世界的に真に受け入れられるような国にまで成長することを祈ってやまない。この国の地勢、風俗、物の考え方などがわが国のそれらに極めて類似し、また非常に親日的であるところから、特にこうした感じを深くする。